

強張踊小論

松 原 武 実

はじめに

強張踊（ごうちょうおどり）という、あまり聞きなれない名前の踊が県内何ヶ所かにあった。現在指宿市西方中川にて唯一踊られている「ごちょうおどい（ごちょう踊）」はこの転訛である。昭和48年（1973）の『国分郷土誌』は強張踊に「ごておどい」と読みを付しているが、これも訛った言い方である。

強張は私の手元の漢和中辞典には見つからず、国語辞典では「こわばる」「こわばり」「つよばり」などの意味にこの字が宛てられている。小学館の『日本国語大辞典』では「強腸」「剛腸」と表記され、「強くたくましい」意味とされる。「強張」はその漢字違いと見てよい。現在も使う鹿児島弁に置き換えると「向こう見ず」「無鉄砲」というほどの意味をもつ「ボッケ」に近かろうか。そういうニュアンスももつ「強張踊」とは何なのか（何だったのか）を検討するのが本稿のテーマである。南九州の太鼓踊系芸能の成り立ちの一端が隠されていると思っている。

強張踊は江戸時代直前の清水郷（現在の霧島市国分の城山の北側一帯）から起こったという伝承がある。まずこれを検討することから始める。伝承を理解するために前提とすべき出来事があるので簡単に確認しておく、豊臣政権は島津国を分断する政策をとった。当主義久に大隅と諸県、弟義弘に薩摩を与え、それぞれの蔵入地（領地高）をわずか10万石とした。抗すべくもなく、義久は国分浜之市の富隈城に移った（注1）。

強張踊は資料によっては強跳踊とか強腸踊とも記されるが、本稿は引用文を除いて強張踊と表記する。また武士踊は武者踊とか侍踊とも書かれ、江戸時代の資料ではしばしば土踊または土躍と書かれる。「さむらいおどり」と呼んでいいであろうが、本稿では武士踊と書いて「ぶしおどり」と読むことにする。

第一節 清水郷に伝わる由来伝承

前出昭和48年（1973）の『国分郷土誌』に強張踊の始まりについての伝承が紹介されている。ひとつは「清水村誌」に書かれた話として、もうひとつは国分郷在住の伝承者の伝える話である。簡単に要約すると、前者は島津義久が国分富隈城へ移住した際、その祝賀として屋形の工事中に使用した心棒その他を持って踊ったのを義久が見て「強張（ごうちょう）な」と言って喜んだことから始まったとする説。後者は義久が富隈城在城の時、関ヶ原後の心労に沈んでいるのを慰めようと家臣達が仮装して踊ったのが始まりとする説である。

歌詞や楽器や隊形も示されているので、そこから判断すると強張踊の内容は加世田で現在もおこ

キーワード：民俗芸能，太鼓踊，武士踊

なわれている武士踊の系統である(注2)。武士踊は島津藩内のほぼすべての郷にて士族が踊った儀式性の強い踊である。「ほぼ」といったのは、すべての郷でおこなわれたかどうかを確認できていないからだが、およそ「すべて」といってもいいだろう。なかでも鹿児島城下ではひととき大規模な武士踊が催行された(注3)。これらを普通は強張踊とは呼ばない。国分ではなぜそう呼ばれたのか。

前掲『国分郷土誌』(注4)は「清水村誌にこの踊のことがくわしくでている」とする。清水村^{きよみず}は江戸時代の5ヶ村が合併して明治22年(1889)に成立した行政村で、昭和29年(1954)に国分町に吸収される。江戸時代から明治22年までは清水郷(西隣と南隣が国分郷)で、地頭^{でしまる}仮屋は弟子丸にあった。国分中学校の東にあたる。南側山上に中世清水城、その南麓に国分新城(現国分小学校)がある。南西方向の富隈城とも近く、国分新城はすぐそばである。富隈城修築にも国分新城建設にも、清水とその近辺だけでなく、大隅各地から家臣団はそれぞれの領地の人夫を率いて馳せ参じたであろう。

さて上に述べた清水村誌という書物を私は探し出すことができないでいる。鹿児島県立図書館にも霧島市立図書館にもない。ただ鹿児島県立図書館に大正4年(1915)の『清水村史料』と題する手書きの書類がある。また別に『清水村郷土誌資料』というタイトルを付された、手書き(10行24字詰原稿用紙に書いたもの)の原稿を県立図書館が製本して黒のハードカバー6冊(六編)とした本が所蔵されている。第二編を欠いて第六編までである。村誌作成を前提とした原稿らしい。執筆年が記されていないが、中の統計データを見ると昭和11年(1936)が最新になっているので、その後の数年以内に書かれたと思われる。県立図書館の書誌には昭和15年(1940)とある。戦時体制のために刊行されなかったと考えられるが、右の『国分郷土誌』に記載がある以上、どこかに完成本が存在するのかもしれない。

この第六編に「強張踊並ニ其起り」という小タイトルの付いた記述があり、内容は前掲大正4年(1915)『清水村史料』を要約したものである。『清水村史料』には次のように記されている(Aとする)。古い書類からの転載であるらしい。下線は私による。

A 文禄四年乙未、太守龍伯公、国分浜ノ市富ノ隈ノ江、鹿児島本御内ヨリ被遊御移候処、慶長元年丙申、清水士御移後御祝儀トシテ土躍、仕備御上覧候處、強力業之負ヒ物ニテ罷出候ニ付、別テ御機嫌能御満悦ニテ、強張踊ト被遊御意事ヨリ強張躍ト名付、躍来候、其後国分曾於郡敷根日当山、土踊此五ヶ所同断仕来候事。

慶長十年癸巳龍伯公国分新城山下富ノ隈ヨリ被遊御移、御座在城中、年々土踊備御上覧候、御逝去之以後、御年廻ハ勿論、間ニモ有之、訳ヲ以テ願申上御免ノ上、古例之格式不相捨様、踊仕来候通申傳候。

要約すると前半は文禄4年(1595)、太守島津義久が国分の富隈に移住した。翌年の慶長元年(1596)、清水の武士たちがそのお祝いとして武士踊を踊った。強力^{こつりき}という山伏仲間の荷物運び役のように物を背負って踊ったので、義久公は「強張な踊である」としてとても喜んだ。それで以後これを強張踊と名付けて踊ってきたのである。その後国分・曾於郡^{そのこおり}・敷根・日当山を含む周辺五つの郷が同じように踊った。後半では慶長10年(1605)、義久は国分城山の麓に国分新城を設営して富

隈より移り住んだ。国分新城在城中は毎年武士踊を見た。義久逝去のあとも毎年、上演の許可をもらって古例の通り武士踊を踊ってきたと言われている、とある。

このあと歌詞や踊の隊形などが記されている。Aの中に「土踊」「土躍」と書いてあるように、内容は要するに武士踊である。そして後半には「古例の通り」とあるから、国分新城に移ってから「強力業之負物」をした人物が登場し、毎年踊られたのである。

つまり武士踊を踊っているのだが、これを強張踊と呼んだ理由は「強力業之負物」のゆえと見ていい。これがあれば強張踊、なければただ武士踊ということになる。「強力業之負物」とは何なのかについてはあとで述べることにして、次は隣の国分郷の伝承を見る。

第二節 国分郷に伝わる伝承

昭和63年（1988）3月、加治木在住の天吹の伝承者であり師匠だった白尾國利氏から「国分の昔の強張踊の歌の録音を入手したのだが…」と連絡を受け、びっくりして飛んで行ったことがある。最後の伝承者有馬武二（当時の国分市車田在住）という人が歌った古い録音テープ（オープンテープ）があった。外箱に、昭和34年（1959）2月1日録音というメモ書きがある。子息の有馬武典という方から預かったという。さっそくカセットテープに写した。ちなみに有馬武典も昭和57年（1982）、鹿児島県教育委員会文化課の事業として国分市がおこなった民謡緊急調査の際に同じ歌を録音している。もちろん歌い方は武二と酷似している。

テープの箱には古い書き付けをペンで書写したメモが添えられていた。短い歌詞が8首あり、それぞれに歌詞の説明（解釈）、そして強張踊のいわれが書かれている。前掲昭和48年（1973）『国分郷土誌』にも、これと同じ内容が前述Aとは別に収載されている。これをBとする。長いので核心部分を次に掲げる。

前述したように関ヶ原の戦いの直後、富隈にいた義久は関ヶ原敗戦の報に接していたく消沈していた。そこへ義弘が帰還した。喜びひとしおも束の間、病いがちの老体を襲ったのは島津家の行く末。再び深い憂慮の日々を過ごすことになった…。時期としては前掲Aの前半（富隈へ移住）と後半（国分新城へ移住）の中間にあたる。読みやすいように句読点を私が付けた。下線と括弧内も私による補足である。

B 松齡様（義弘のこと）全く関ヶ原より御帰陣遊ばされし故、（義久公は）御悦にて一先御安堵遊ばされ候へ共、御老体殊に御病後にもあらせられ、我國家の御事に深く御心を御悩しなされ候に付、御心身御老し遊ばされ、只惘然（もうぜん）として御氣抜の様御成遊ばされ候て、此之儀を諸士一統承り伝え、深く御配慮遊ばされ、斯の通りの儀誠に歎わしきことなり。此の上は何れも申合わせ、御鬱氣晴しの御慰に踊りそいたし、御覽に備え奉り、然可しとの申訳にて、此の時は外四郷共に一所に集り、拍子もなく夫々己々は見立以て、異形異類の形相にて御城に寄せ集り、時々声を揚げ、時々えいとしえいとと飛び廻り候由。一人は杵臼を背負い、一人は古き長持ちを背負い、二才衆に抽んで飛ぶものあり、是御目に留めさせられ、彼の櫃の中に何を入れ居り候や、持参候様申付けよと御意遊ばされ、御列衆より其通り申付けられ候えば、持参り仕り候に付、夫れ明けよと仰付けられ候ては則ち明け候処に、酒樽一つ有是も空樽なり。是を御覽遊ばされ、さて之強張々々

と仰せられ、大いに御笑放なされ候由、夫より此の踊りを強張踊り云い付けたる。古老の申伝えに之有二人の負物いたし候もの、名を聞きしかど失念いたし。思うに踊郷の人とも然れば、之近郷に限らず遠郷よりも志しあるものは勝手次第に出張りたりと見えたり。

国分郷と周辺4郷(清水・敷根・曾於郡・日当山)も一緒になって踊り、少し離れた踊郷(旧牧園町)からも加わっていることがわかる。「拍子もなく」とあるのは「太鼓やカネの伴奏もなく」という意味だろう。奇声を発しつつ、歌はまあそれなりに歌ったのだろう。きちんとやるためには人員を編成し、役割を決めるなど準備と稽古が必要だ。しかし関ヶ原が終わったばかり。関ヶ原の直前は庄内の乱という領内を揺るがす大内乱、さらにその直前は朝鮮の役、という具合に、益のない消耗戦の連続によって島津国内は疲弊しきっている。そしてこのあと徳川政権との衝突の避けられない可能性をはらんだ時期である。暗雲立ちこめる中で、盛大な祝賀の踊(武士踊)催行の話が持ち上がる状況ではない。

だったら…、と誰かが言い出したのだろう。踊も歌も適当でいい。それぞれが思い思いに異形異類の仮装をして加わり、杵や臼や長持ちや酒樽や櫃など重い物を持って飛び跳ねて、今風にいえば、景気づけをしようではないか、と言い出したのだろう。だから離れた踊郷(旧牧園町のこと)からも臨時に加わることができたのである。ところが終わってから、背負ったり抱えたりしたうちの酒樽をあけてみると中はカラ。いかにも重そうに(本物であるかのように)振る舞ったのである。それが迫真だったのだろう。義久は「強張々々」と褒め、大いに笑ったというのである。重たくないものをいかにも重そうにするのが仮装というものである。仮装は見事であればあるほど痛快であり、驚きと笑いを誘う。そこら辺にある杵や臼や長持ちを持ち出したような記述だが、実は作り物(軽い)だった。それなりの準備はしていたのである。

異形異類の形相をしていたというから、顔を塗る、何かを被る、などして実在の人間でないような扮装をしたのであろう。そして普通には持てないものを持ち、飛んだり跳ねたりしつつ怪力怪人であるかのように振る舞う。これが強張と呼ばれたことの本質と見ていいだろう。義久がホントにそう言ったかどうかの詮索はあまり意味がない。義久のクチを通して武者風に「強張」と表現されることによって呼称がオーソライズされたのである。以後これが代名詞となる。Bに続いて次のような記載がある。

C 往古異形異類の事計り仕り踊り来り候へ共、甲冑著いたし候儀は後の事にて候。尤も昔は大太鼓迄にて、拍子もあまり定りなかりしとか。唐太鼓は尚以て其後より用いられし由。鹿兒島士踊りを見まね此大鼓を用い来るの由。甲冑著いたし候も是より始まりたり。

これによると、武士踊に登場したのはもともとは異形異類のみだったことがわかる。甲冑武者などはのちのことで、楽器も大太鼓だけで、拍子もきちんとはそろっていなかった。唐太鼓はあとから付け加わったもので、鹿兒島城下の武士踊をまねて用いるようになった由。唐太鼓(鹿兒島弁ではカラデコ)というのは、直径30cmほどの平べったい太鼓を左手で掲げ、右手のバチで叩くものである。武士踊の楽器編成等については改めて検討する。

本節冒頭に述べた録音は、歌だけを録音したものだから太鼓はなく、旋律の動きは保続音が多く、

謡曲調である。実際の武士踊では太鼓やカネは独自のリズムを打つというより、歌（歌唱）の区切りや要所々々で打たれる程度だったであろう。現在催行されている加世田の武士踊（二才踊）でも無伴奏で歌われている。

その加世田の武士踊には甲冑姿や武者姿が登場する。甕島の里と手打の武士踊にもかつてはそれらが登場した。樋脇の塔之原の武士踊も同様。これらはしかしCによると本来の異形異類ではない。異形異類は現実に存在しないもの（存在しにくいもの）の謂いでもある。甲冑武者や鎧兜は当時普通に存在したものである。これらが登場しても、だから強張踊と呼ばれなかったと見てよいと思う。異形異類が消えたのである。

天保14年（1843）成立の『三国名勝図会』（注5）にも起源説が載っているので一瞥しておこう。卷三十二の「清水」の項に次のように書かれている。

D 当邑の傳記に云、文禄四年4年、貫明公、鹿兒島より国分富之隈に御移城の時、修築ありしに、近郷の諸士是に役す、慶長元年、諸邑の士衆、其修築成就して公の御移徙ありしを賀し奉り、公の前庭に於て舞躍を興業す、時に諸邑の士衆、美麗の装束にて舞躍をなせしに、独り清水の士衆のみは、甲冑を帶し、大棒を持ち、豪壯の物を負い、鐘・太鼓を鳴らし、軍中の形勢をもって舞躍をなす。公大きに歓悦し給ひて、強張なる事哉と御賞美ありしかば、是より年々此舞躍を興行し、強張舞躍と名けて、清覽に備へけり。其後当邑、及び国分、曾於郡、敷根、日当山の五ヶ郷、此強張舞躍を同く興行すといへり。公の御年回忌には当邑の士衆、官府に乞て許を承け、此舞躍を興行せり、此説に拠れば、土俗に称する強張舞躍は清水邑士より始めしにや。

下線部にあるように、甲冑武者や棒持ちが登場し、豪壯の物を背負う仮装集団が加わり、カネ太鼓が打ち鳴らされる中で賑やかに軍陣隊形をとりながら踊った。これを強張踊のルーツとしている。長く続いた江戸時代という平和な時代には武士たちも鎧冑を着すことはなかったであろう。だからこれも仮装の対象になったのだろう。結局Dは江戸時代に藩内各地で華やかにおこなわれた派手々な仮装が、強張踊のルーツをイメージする時に重ねられている。各地で語られる強張踊の始まりについての説はおおむねこのようなものであり、慶応年間の由来譚の伝える姿が脚色されていると云わねばならない。

重要なのは、単に義久の氣鬱を晴らすために（義久を喜ばせるために）仮装大会のようなことをしたのではないということである。つまりこの時に初めて異形異類が登場したわけではない。なぜこの時がルーツのように語られ、強張踊と呼ばれることになったのか。そのことについて述べる前に分布について見ておこう。

第三節 強張踊の分布

現在、武士踊がほぼ伝承を守りながら毎年開催されているのは南さつま市加世田のみである。不定期開催をしているのは薩摩川内市の塔之原（旧樋脇町）で、これも昔の姿をしのぶことができる。甕島の里と手打の2ヶ所には大規模な武士踊があったが、現在は10数分に簡略化された少人数の舞台芸能になっている。栗野の磨欲踊とぎほしは平成28年（2016）に上演されたが今風に大きく変わっている。

出水の稚児請も、本来は武士踊だったはずだが、復活のそれはかつての姿を留めず、甲冑武者が出るだけである。異形異類は登場せず、登場したという伝承も途絶え、強張踊とも呼ばれない。

強張踊という呼称を残す芸能は、現在は唯一指宿に「ごちょう踊」があるのみである。「ごちょう踊」のつづまった言い方だが、内容は武士踊ではなく、県内一般の太鼓踊系統で、江戸時代は農民が踊ったものである。鬼人（奇人）二人が登場するところに強張踊（異形異類）の片鱗を留めていると見ていいだろう。最近これを屋久島でも踊っている。強張踊と呼ばれた踊が県内にどのくらいあったのだろうか。郷土誌や私の聞き取りなどによる事例をあげてみよう。

（1）国分周辺

国分周辺については第一節で述べたので簡単に要約する。慶長年間（義久の頃）は清水・国分・敷根・日当山・曾於郡の近辺五郷の士族が集まっていっしょに踊ったもよう。踊郷（旧牧園町）からの参加もあった。藩政が安定してくると強張踊は各郷ごとに踊られるようになり、やがてバケモノ（異形異類）は陰をひそめ、現実に存在する甲冑姿などが出る武士踊に変化していったと推測していいだろう。

『隼人郷土誌』に強張踊が踊られたことが記されている（注6）。近代の隼人町は日当山郷・国分郷（一部）・曾於郡郷（一部）から成り、もともと前掲の五郷に属しているわけだから、在住の士族は上に述べた慶長年間の催行にも参加していたであろう。同誌には義久の正室実深夫人のために建立された東林寺に、夫人の追悼供養として50年に一度、朝日・西光寺・東郷の衆中（武士）が集まって強張踊を踊り、250年間続いたとあるから嘉永年間（1848-54）まで踊られていたのである。

国分郷では前掲『国分郷土誌』によると、明治18年（1885）、明治31年（1898）、明治38年（1905）に強張踊を踊った記録があるとし、その書類の一部（楽器編成など）が掲載されている。しかし明治以降のこれらは強張踊というだけで、異形異類が登場したかどうかはわからない。おそらく登場していない。

『庄内地理志』は文化文政時代（1804-1830）に都城島津家の編纂した地誌（注7）だが、この中に記録奉行から出た「神社の祭礼について報告をしなさい」という達しがある。「郷土踊（武士踊のこと）について、いつからどういう訳で踊ってきたのか、書いて出しなさい。特に国分の強張踊については詳しく報告しなさい」とある。その報告がないのが残念だが、この時期に至っても国分にて強張踊がおこなわれ、よく知られていたことがわかるのである。

（2）加治木

始良市教育委員会発行の『始良市誌史料二』（注8）の中に「隅陽記」という書類が翻刻収録されている。解題によると、元和元年（1615）から宝暦13年（1763）までの加治木島津家の記録所による年代記である。年譜形式の中に武士踊と強張踊の上演が記載されている。強跳踊または強腸踊と書かれているが、本稿では強張踊と表記する。農民の太鼓踊や町方の町踊の記載もあるが、煩瑣を避けるために武士踊と強張踊だけを摘記する。鹿児島城下（麿府）の武士踊も混じっているが、これも参考のために記す。

寛永10年 (1633)	7月23日	武士踊
寛永15年 (1638)	7月21日	武士踊
承応3年 (1654)	7月21日	強張踊
万治2年 (1659)	7月21日	強張踊
寛文11年 (1671)	7月21日	強張踊
寛文12年 (1672)	7月21日	強張踊
延宝3年 (1675)	7月21日	強張踊
延宝4年 (1676)	7月21日	強張踊
宝永3年 (1706)	3月16日	麿府の武士踊か
宝永7年 (1710)	8月27日	強張踊
享保7年 (1722)	10月22日	麿府(上)の武士踊
享保7年 (1722)	10月25日	麿府(下)の武士踊
宝暦2年 (1752)	3月19日	武士踊
宝暦12年 (1762)	正月18日	麿府(上)の武士踊
宝暦12年 (1762)	正月23日	麿府(下)の武士踊
宝暦12年 (1762)	正月25日	麿府(上下)の武士踊

鹿児島城下の武士踊が記録されているのは、加治木島津家が麿府での武士踊催行の儀式に何かの役割をもって参加したからであろう。少しコメントすると、麿府での武士踊はきわめて大規模のもので、上と下に分かれて上演された。上に「麿府(上)」とあるのは、鹿児島城下の士族居住区かみしもを上下に分けたうちの上区であることを示す。宝永3年(1706)には4代藩主吉貴(21代当主)の初入国の祝賀にて踊られた。『島津国史』に「宝永3年(1706)3月13日、上方士踊。16日下方士踊。賀儀を献ずる也」とあり、尚古集成館所蔵の「御関狩并士踊由緒方被仰渡候しらべ留」(注9)でも取りあげられている。享保7年(1722)10月22日と25日は5代藩主継豊(22代当主)の初入国の祝賀である。宝暦12年(1762)正月は8代藩主重豪(25代当主)の時だが、何の祝賀か突き止めていない。

麿府を除くと加治木では、武士踊と強張踊が区別されて記載されている。したがってここでの強張踊は国分と同様、武士踊に異形異類の仮装が加わったものと見ていいだろう。全10回のうち3回は武士踊のみ、7回は強張踊である。日程は延宝4年(1676)までは7月21日にほぼ確定していたようだ。以後は上演頻度は明らかに少なくなっている。

また『始良市誌史料二』には「嘉永三年新納仲左衛門日記」という文書もある。嘉永3年(1850)2月22日と27日に麿府での武士踊催行が記され、7月21日の「士踊座拍子有之候」とあるのは、地元での正式な武士踊上演ではなく、カネ・太鼓を打ちつつ歌だけを歌ったということだろう。

加治木にはもうひとつ『加治木古老物語』という文書があり、鹿児島県立図書館発行の鹿児島県史料集48(注10)と前掲『始良市誌史料二』(注11)に翻刻されている。成立年については前者の解題には記載がなく、後者は宝暦5年(1755)から天明7年(1787)の間としている。この文書には101(前者)または102(後者)のエピソードが収められているが、この中に武士踊と在踊(農民の太鼓踊)の起源について記載はあるものの、強張踊については何もない。

(3) 指宿周辺

指宿周辺では「ごちよう踊」といい、周辺の何ヶ所かで踊られていた。現在も踊っているのは指宿市西方の中川のみである。昭和10年(1935)頃途絶えたものを昭和52年(1977)に復活、以後毎年元旦に公民館裏の高祖神社に奉納し、そのあと公民館庭にて踊っている。断絶以前から歌はなく、雨乞や指宿神社の浜下りにも出たという。私が平成28年(2016)に見学した折にはカネ(大小あり)と小太鼓(女装)を中にし、大太鼓が外輪となって取り囲み、これ以外に鬼面(右手に唐団扇、左手に棒)3人が登場、移動の時は列を先導、輪踊の時は一番外で飛び跳ねていた。衣装が極端にカラフルなのは近年の変化だろう。鬼面が登場する以外は南薩系の太鼓踊とほとんど変わらない。

以下に述べる指宿周辺にて踊られていた他のごちよう踊も同様であろう。北からあげる。喜入町(現在は鹿児島市)生見の古久川(川畑・古殿・久保園)にて明治末まで踊っていたことを、昭和57年(1982)に地元にて聞いた。明治になってから指宿市の新西方より伝えられたものという。太鼓・イレコ(小太鼓)・カネ(大小あり)があった。カネだけ叩いて雨乞いをしたこともあったという。鬼などがでたかどうかは確認できなかった。古久川は旧喜入町の南端にあり、指宿市の小牧に接する純農村地帯である。

その指宿市小牧にもあったことが昭和60年(1985)『指宿市誌』(注12)に載っているし、私も現地で確認したが、内容についてはわからなかった。『指宿市誌』にはこのほかに中川(上述)・玉利・岩本で踊られたとある。私の聞き取りでは新西方にもあり、大正末頃まで踊り、鬼面がでたという。玉利は昭和9年(1934)の国鉄指宿線開通の記念に踊り、戦後に復活の話があったものの実現しなかったという。岩本は昭和5年(1930)が最後という。また山川町では大山で大正13年(1924)頃まで踊っていたという。

以上まとめると、喜入町から山川町までに分布するごちよう踊は、中心が指宿市にあり、そこから周辺に広がったと見ていいようだ。内容は南薩系の農民の太鼓踊であり、鬼面の出現はすべての事例で確認はできないが、鬼面が出たと見ていいだろう。

所崎氏は「強張踊が(指宿の)ごちよう踊になった証拠はない」(注13)とする。確かに国分方面の武士踊系列の強張踊と、指宿周辺の農民の太鼓踊系列のごちよう踊とは踊の内容が違っているので、強張踊が伝播の過程で変化して農村に伝わりごちよう踊になったとは考えられない。その一方、所崎氏は「県内の太鼓踊の分類」(注14)の中で、「指宿市にはごちよう踊が多い。これらは農民が武士から教えられておこなったのであろう」ともしている。農民の太鼓踊を士族は踊らないし、したがって士族が教えることはないと思うが、強張踊とごちよう踊の関係をどう考えるかは重要なことなので、このあたりはさらなる説明を期待したい。

(4) 種子島

『西之表市百年史』に「強張踊が宮原に伝承されていた。もとは花里崎の芸能で、薩摩伝来の踊」とある(注15)。歌詞の一部は昭和10年(1935)の旧制種子島中学校編『郷土研究』(注16)、昭和27年(1952)の『ちくら』4号(注17)に掲載されている。

下野敏見は昭和38年(1963)の『種子島民俗芸能集』(注18)の刊行当時、宮原の伝承者から重要な話を聞いている。それによると旧制種子島中学校の昭和4年(1929)の新校舎落成記念で踊り、その他の行事でも踊った。大太鼓と小太鼓とカネの編成で、鎧姿や陣羽織姿もいたといい、全体は

「さき庭・中庭・あと庭」の三つの庭からなり、合計24曲からなる組踊だったという。それぞれの最後に「くずし」が付いた。鬼面が出たかどうかははっきりしない。

西之表の赤尾木城下には、城下居住の士族（麓士族）の踊る正式の武士踊があった。『西之表市百年史』（注19）によると士族は麓八ヶ町（中野、天神、田屋敷、納曾、小牧、中目、松島、野首）住んでいた。右の宮原と花里崎は麓地区の北隣にあり、そこに住む士族はおそらく庶流である。麓士族（嫡流）とは区別され、武士踊には参加できなかったはずである。そこで武士踊と農民の太鼓踊（種子島では大踊といい、農村集落はそれぞれ大踊をもっていた）を折衷させたような踊を作り出したのではないか。このことは下野敏見も前掲『種子島民俗芸能集』の中で指摘している（注20）。

そうだとすると、強張踊という名称はどこから付けたのだろうか。自分達で考え出したとは思えない。当然ながら国分や加治木方面の強張踊をモデルにしたと考えていい。種子島氏は藩の重役を勤め、しばしば加治木に赴いている。

南種子町下中の真所（まどころ）にも強張踊があった。下野敏見の前掲書によると、真所の人が西之表に下男に出て覚えてきたものだという。明治になってからのことかもしれない。

（5）屋久島

旧屋久町教育委員会所蔵の古い書類に昭和6年（1931）の財部十助『鹿児島県熊毛郡下屋久村農村調査』と題する手書きの書類（注21）があり、その中に「ゴチョウ踊（タイコ踊）」として歌詞の一部が記載されている。どの地区かは明示がない。

宮本常一の『宮本常一著作集16屋久島民俗誌』（注22）は昭和15年（1940）の1月28日から2月13日に至る紀行文だが、この中に小瀬田・原・平内はろう ひらうちに「ごちょう踊」があったことが記されている。手子踊（てこおどり）とも呼ばれたという。太鼓踊を鹿児島ではテコオドイというので、これに手子踊の漢字を宛てたのである。原については『屋久町郷土誌第二巻村落誌中』に、昭和の初め頃までであったがその後中断、十数年前に指宿市中川のものを習って取り入れたとある（注23）。そして「五調踊り（正しくは「五調子踊り」）は宮人たちの優雅な五調子（壱越調など雅楽の調子）の五調で合わせ、優雅に踊るのが見応えがあったそうである」とするが、これは雅楽に付会した説である。

第四節 強張踊とは何か

武士踊の中に重い物を背負った異形異類が登場して飛び跳ねた。それを見た義久が「強張々々」と云って褒めたのが強張踊の始まりだという。起源として語られる場面は2回、義久の富隈城修築工事終了と、5年後の関ヶ原直後の島津義弘の帰還後である。どちらも島津家にとってはお家存亡にかかわる深刻な政治状況が進行している。そういう中での祝賀には、義久にも家臣団にもひとしおの感慨と緊張感（高揚感）があったと想像していい。武士踊は正式な準備が十分にはできないままの催行だったろうが、だからこそ異形異類を出して盛り上げる必要があった。演ずる方にも見る義久にも、そしてこれらを取り巻く家臣団や農民たちにも特別に印象深いイベントだったのだ。だからこそ、これが始まりだと言いつたことになる。

異形異類はしかしこの時初めて出たのだろうか。盛りあげるための仮装大会を清水郷の家臣団が

思いついて実行したのだろうか。起源譚は一般に説話風に語られるが、多くの場合、すでに事象があり、それを解釈しなおして説話風にしたたものである。起源譚には時代とその文化が刻印される。つまり異形異類は起源譚以前から出現していたと考えるべきである。すでに洛中洛外では作り物風流（仮装）の文化は全盛期を迎えている。鹿児島の寺社祭礼にても何らかの作り物は出ていただろう。

祝賀を盛り上げるために仮装大会をしたという側面はあるが、盛りあげることが本質ではない。異形異類が災厄を除ける呪術的行動とする考えが、寺社祭礼の中ですでに水脈として流れており、これを武士踊催行にあたって、島津家に押し寄せる危機を振り払う力を得るために応用したと考えるべきであろう。

周知のように、古代から近世初頭に至るまでの芸能は、それを見るための（見る人々のための）単なる娯楽ではない。神仏へ奉納する（ささげる）とする表現も正確ではない。芸能（祭礼）を実施することは、ある目的があって、その目的を達成するための働きかけそのものだったと見るべきである。風水を制御する、害虫発生を阻止する、それらの原因となる怨霊を鎮める、などのために祭礼が実施された。祭礼の中心に神事（祓い詞）や読経や念仏（称名）があり、念仏は歌になり、踊られるようになり、太鼓やカネも加わって芸能となった。祭礼全体が呪術的行為といえよう。

祭礼の外には常に祭礼を妨害しようとする魑魅魍魎が充満し、祭礼の持つ呪術力を弱めようとする力が働いている。祭礼の外からの攻撃を毒をもって毒を制するやり方で撃退するために、異形異類の相貌をした悪鬼羅刹を登場させたと考えられる。鬼はその代表でありリーダーである。祭礼の守護者と云っていいだろう。ただし本来、異形異類は祭礼を襲撃したのではないか。どこかで祭礼守護に変化したのではないかと私は思っているが、今はそれには触れない。

ところで、武士踊と太鼓踊はもともと渾然一体とした未分離の時代があったはずである。兵農が分離し、両者が身分として分かれ秩序が定まっていくにつれて、それぞれを担当する人々の身分にふさわしい風流化の道を歩き始めたが、これを守るために異形異類はどちらにも必要とされ、引き継がれた。武士踊にも太鼓踊にも出現したと見ていい。

近世になると武士踊も太鼓踊も明確に（意図的に）別々の道を歩き始め、それぞれが見て楽しむものに発展するわけだが、その過程の中で多くは異形異類を脱落させた。あまりにも荒唐無稽だからであろう。しかしいくつかの場合は残り、変質もし、また踊の一環として取り込まれることもあった。太鼓踊の踊り子の衣装に異様な姿が散見されるのは、異形異類の残存なのではないか。これについてはいずれ考えることにして、現在に残る異形異類の変形例をいくつかあげてみよう。

薩摩川内市高城の太鼓踊には現在も鬼面二人（右手に団扇、左手に綾棒）とチョンマゲのカツラを被った一人（右手に軍配、ユカタに小刀を差す）が出る。全体が四列縦隊に整列したあと、三人は前に出て奏楽に合わせて踊り、全体が輪になると踊には加わらない。チョンマゲの人物はいわゆるシンボチ（新発意）の変形であろうか。

薩摩川内市東郷町山田の太鼓踊は山田楽とも呼ばれ、①コガヤン、②アケスメロ、③ウチワケの三つの踊から成る。②③はすたれ①が踊られるが、その中の鬼面によるキジンメ（鬼人舞）と呼ばれる歌舞伎風のパフォーマンスが人気を博し、これだけを上演する場合が多い。太鼓踊演舞の間の余興のようなものである。小野重朗は「太鼓踊りの変遷」(注24)の中で、「鬼人舞を取り込んだのは古いことではあるまいが、太鼓踊としては自己軽視というほかない」と鬼人舞は太鼓踊の本質で

はないと指摘している。しかしこれは少々表面的な見方であろう。縷々述べたように鬼面の登場は、芸能の古い側面が変化したものとして再検討の必要がある。薩摩川内市網津町上網津の太鼓踊にもこれと似たような踊（鬼人つり）が出た。

鹿児島市西別府の太鼓踊は最近（数年前）まで略式ながら、7月28日の地元諏訪神社六月灯にて踊られていたが、サッキョンという右手に長い棒をもち、陣羽織を着た者が出て踊を先導した。昔は鬼面をかぶったかどうかはわからなくなっているが、地元ではサッキョンを先鬼と解釈している。鬼とシンボチが合体したような感じだ。サッキョンが出た太鼓踊はほかに入来町山口のアケスメロ、樋脇町永田のアケスメロ、鹿児島市田上の太鼓踊（注25）、坊津町上中ノ坊の太鼓踊などがある。加治木町や蒲生町の太鼓踊の先頭に出るホタフリは、鬼と合体しないままのシンボチであろう。

サッキョンまたは面を被った先導役は他の芸能にも出た。棒踊では郡山町向江谷、鹿児島市の吉野から花野にかけての数ヶ地区、喜入町各地、鹿屋市根木原町、種子島各地にて確認できる。疱瘡踊では郡山町各地、吹上町永吉麓、鹿児島市小山田町などで出た。

さて太鼓踊にまぎれもなく異形異類が登場した姿は『倭文麻環』に描き込まれている。この本は文化9年（1812）、鹿児島島の国学者白尾国柱によって書かれた伝説や風俗をまとめたもので、豊富な絵図が添えられている（注26）。私は明治41年（1908）の和装刊本（モノクロ）の覆刻を座右としているが、鹿児島県立図書館には明治29年（1896）の手写本（彩色）がある。この二つに所載の絵図については別稿（注27）にて考察した。ここに描かれる太鼓踊は絵図の説明書きによると桜島の太鼓踊で、鹿児島城下の諏訪神社祭礼にて踊られた。太鼓踊の踊り子（大太鼓・小太鼓・カネ）のほかに、仮装集団が描かれている。青史社版には10人、県立図書館写本には17人が見える。青史社版のその部分を掲げる（図1）。鉄棒を持った鬼面、鎧兜の武者、ナギナタを持った烏帽子姿武士と稚児風武士、陣羽織に花笠や鉢巻きの武者などが見える。彼らは何をしているのか。輪踊の列には加わらず、輪の中でただ歩いている風である。



図1 『倭文麻環』の太鼓踊図より

似たような鎧武者は八代市に合併された五家荘（旧泉村）久連子の太鼓踊の江戸時代に描かれた絵図（図2）にも描かれている（注28）。図2には甲冑をつけ鎧を持ち、大小の太刀を差した人物や、



図2 久連子の太鼓踊図

女装風や、長刀や台笠・立笠をもって大名行列を模した人物も登場している。この絵にはカネと小太鼓が一人ずつしか登場していないが、地元民の伝承によると10人以上の太鼓がこの廻りを取り囲んでいたという。図2は周囲の大太鼓を省略している。30曲以上もあった太鼓踊のうち、盆と八朔には念仏と呼ばれる曲が上演された。念仏を唱えながら（歌うように）太鼓踊を踊るもので、戦後しばらくの間は、この時、絵図のように村人たちが鉄砲その他を持って加わったといい、これを大念仏といったと

いう（注29）。念仏という太鼓踊にさまざまな仮装の人々が加わって、猥雑ともいえるような状況が作り出され、これが大念仏と呼ばれたことは重要である。つまり強張踊と呼ばれる以前の、異形異類の登場する武士踊は大念仏だったと思われるのである。

大念仏は久連子よりもはるかに大規模な形でさつま町（旧薩摩町）中津川にておこなわれていた。川崎大十『大念仏踊』（注30）によると昭和30年（1955）までやっていた。いちき串木野市市来町大里の七夕踊も大念仏の系統といえよう。他にも大念仏の名残の芸能はないのか、改めて南九州の芸能を見直してみる必要がある。中津川の大念仏については改めて検討するつもりである。

最後に、強張踊起源説が語るようにモノを背負った異形異類の登場する絵図があるので、触れておく。東京国立博物館に『薩摩国諏訪社祭礼練物図』という江戸後期制作とされる紙本著色卷子一巻がある。福原敏男氏の「鹿児島諏訪神社祭礼の練物風流と太鼓踊り」(注31)にカラーで収録され、あわせて絵の内容が詳しく解説されている。現在の伊集院の徳重太鼓踊と同じような巨大な太鼓を腹に抱き、それぞれ幟旗を背負った太鼓踊行進を、8人の仮装が先導する場面が描かれている。紙幅もないので、その8人のうち先頭の鬼面（図3）と、梵鐘を背負った五番目の怪物（図4）を転載する。



図3 『薩摩国諏訪社祭礼練物図』の先頭の鬼面



図4 『薩摩国諏訪社祭礼練物図』の5番目の梵鐘を担ぐ鬼

福原論考は8人について次のように説明する。①鬼面，②蓑笠を着けて笥を背負う（二十四孝），③烏帽子甲冑の武士が鬼の手を背負う（羅生門の渡辺綱），④甲冑姿で長刀を持つ武士（羅生門の平井保昌），⑤鬼面姿で鉄棒で大鐘を吊り下げて担ぐ（大津絵の鬼と釣り鐘），⑥酒甕を背負う猩々，⑦酒甕（人が扮装）をかつぐ酒仙，⑧杖を突く琵琶法師。②③④⑥は能楽の主人公である。古典から題材をとられているのは風流化の進んだ結果である。本来は起源譚の語るように，その辺にあるものを何でも持ったり，担いだり，背負ったりし，さまざまな仮装が出た猥雑なものであっただろう。

興に載って踊りだし，何でも担いで強張さを表現するという伝統は江戸時代には消え去っていたかと思いきや，伊東凌舎の「鹿児島ぶり（天保6・7年）」（注32）に「去る方へ呼ばれた折，軍談の最中に，暈をあげ，是を担ぎ，踊り出した。または竹籠をかぶり踊った。これは誠にしゃれだが，風義別段に候」と書かれている。この人は江戸の講釈師で，藩主斉興の入国の供をして鹿児島を訪れ，鹿児島の風物を書き記した。城下のどこかに招かれて軍談を語っている最中に，聞いていた侍が興奮して，暈を剥いで担いで動きまわり，竹籠を被る者もいたというから，伊東凌舎も驚いたことだろう。強張踊の伝統は根強く，こんなところに残っていたのである。

注1 山本博文『島津義弘の賭け』（平成9年（1997），読売新聞社）p.141。

注2 南さつま市加世田の竹田神社では毎年7月23日の夏祭り（六月灯）の中心イベントとして武士踊（加世田土踊（かせださむらいおどり）と通称）が踊られている。

注3 鹿児島城下で大規模な武士踊が催行されたことは，藩庁書類である『列朝制度』やこのあと述べる『島津国史』ほかの史料によって知ることができる。

注4 『国分郷土誌』（昭和48年（1973））p.1153。

注5 昭和57年（1982）発行の青潮社版を使用した。

注6 『隼人郷土誌』（昭和46年（1971））p.171。

注7 「庄内地理志」は『都城市史史料編近世2』（平成14年（2002））に収録。

注8 『始良市誌史料二』（平成26年（2014））。

注9 『鹿児島民俗』75号（昭和57年（1982））に森田清美氏によって，同121号（平成14年（2002））に所崎平氏によって翻刻されている。

注10 鹿児島県立図書館発行の鹿児島県史料集48（平成21年（2009））。

注11 注8に同じ。

注12『指宿市誌』(昭和60年(1985)) p.488。

注13 所崎平「加治木太鼓踊の特徴」加治木町史談会八十周年記念誌『加治木史談』(平成21年(2009)) p.64。

注14『鹿児島民俗』122号(平成14年(2002)) p.15。

注15『西之表市百年史』(昭和46年(1971)) p.515。

注16 旧制種子島中学校の教員が種子島の民俗を含む博物的な冊子(手書きの謄写印刷)を出している。種子島の郷土誌研究の嚆矢といえる。私は平成4年に旧屋久町教育委員会所蔵の郷土資料の中で見た。

注17『ちくら』は地元西之表の郷土誌研究者によるミニレポート集で、昭和27年(1952)4月から昭和31年(1956)9月まで12号が手書の謄写版で出されている。西之表市立図書館に所蔵。

注18 下野敏見の『種子島民俗芸能集』は昭和38年に中種子町野間に開業していた西要医師の主宰する種子島博物館(現在の西之表市の種子島開発センター鉄砲館ではない)から刊行された。

平成22年(2020)鹿児島市の南方新社より『南日本の民俗文化誌5種子島民俗芸能集』の中に復刻所収されている。

注19『西之表市百年史』(昭和46年(1971)) p.498。

注20 下野敏見『種子島民俗芸能集』(昭和38年) p.121。

注21 平成4年に旧屋久町の郷土誌作成の調査の折、旧屋久町教育委員会所蔵の書類の中で見た。

注22『宮本常一著作集16屋久島民俗誌』(未来社, 昭和49年(1974))。

注23『屋久町郷土誌第二巻村落誌中』(平成7年(1995)) p.215。

注24『鹿児島民俗』99号(平成3年(1991))所収。のち『小野重朗著作集4祭りと芸能』(第一書房, 平成5年(1993))にも収録。

注25『田上郷土誌』(昭和41年(1966)) p.121。

注26 明治41年(1908)の和装刊本(モノクロ)の覆刻が千葉の青史社から刊行されている。

注27「藩政後期に描かれた鹿児島城下の太鼓踊絵図の検討」鹿児島国際大学国際文化学部論集第23号第1号 令和4年(2022)6月。

注28 天保17年(1836)天草代官所役人村次常真が五家荘を巡検した時の見聞録「肥後国五ヶ荘図志」に記されている。図2は『日本庶民生活史料集成』第9巻(昭和41年(1966), 三一書房)に収録されている図を転載した。

注29 久連子の太鼓踊については『久連子古代踊調査報告書』(平成26年(2014), 八代市妙見祭活性化協議会)に詳述した。

注30 川崎大十『大念仏踊』(昭和31年(1946), 大念仏踊奉納委員会)。

注31 国立歴史民俗博物館研究報告第114集(平成16年(2004))に所収。

注32『日本庶民生活史料集成』9(三一書房, 昭和44年(1969))に所収。p.399。